



ヤナギムシガレイ (太平洋北部) ①

ヤナギムシガレイは北海道南部以南の日本各地に広く分布し、本評価群はこのうち青森県から千葉県までの太平洋岸に分布する群である。

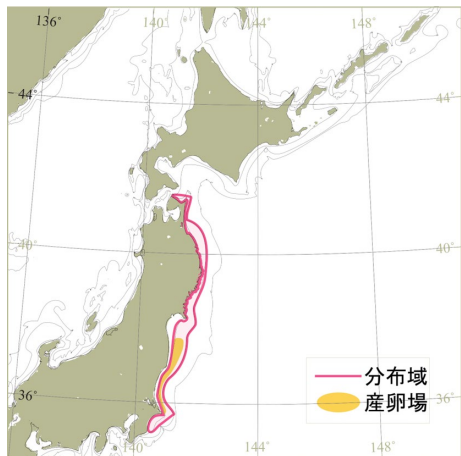


図1 分布域

太平洋岸では北海道噴火湾以南、水深400m以浅の砂泥底に分布し、水深100m前後の海域で1~6月に産卵する。

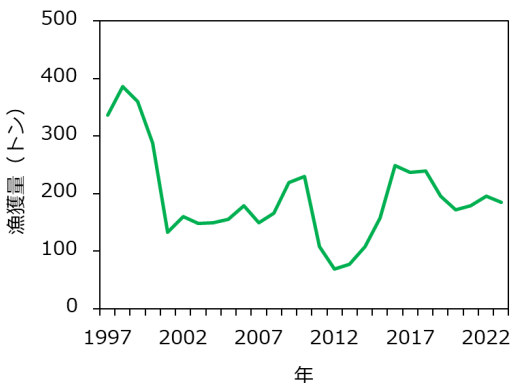


図2 漁獲量の推移

漁獲量は2011、2012年に東日本大震災の影響で減少したが、その後速やかに回復した。2023年は186トンと前年よりやや減少した。

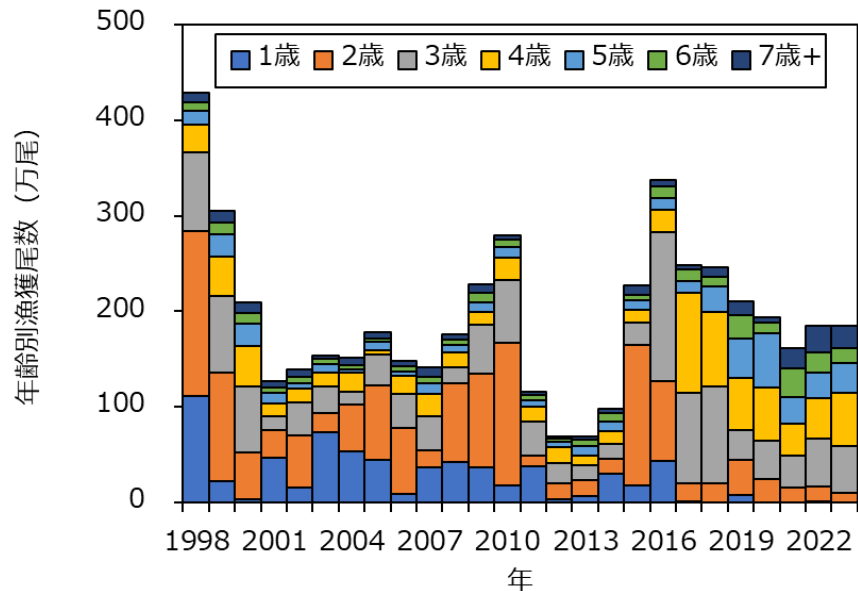


図3 年齢別漁獲尾数

漁獲尾数は2016年以降減少傾向で、2023年は184万尾であった。近年は若齢魚の占める割合が減少し、3歳魚（灰）以上の漁獲が主体となっている。

ヤナギムシガレイ (太平洋北部) ②

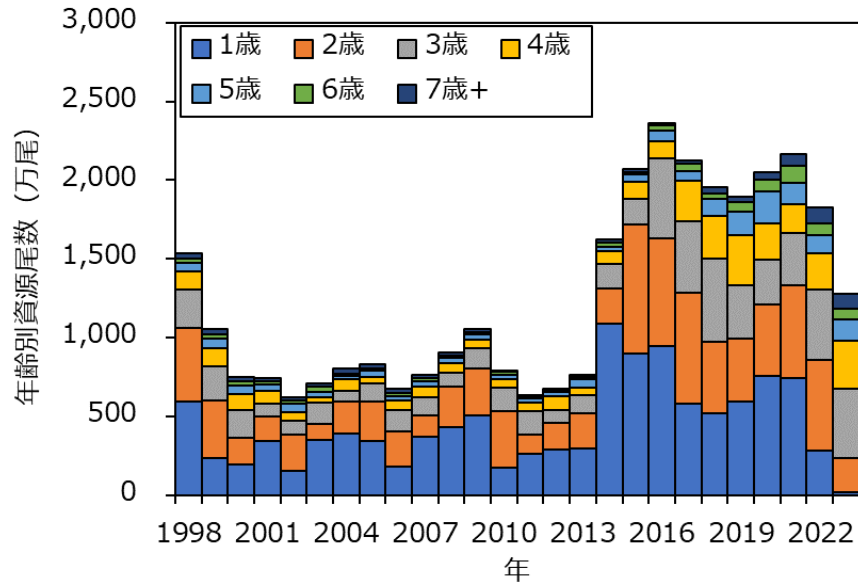


図4 年齢別資源尾数

2013年以前は1歳魚（青）、2歳魚（橙）が中心で、2014～2016年に多くの加入（1歳魚）があったがその後は減少傾向となっている。2017年以降は3歳以上の割合が多く、近年は幅広い年齢で構成されている。

なお、加入量は各年の1歳魚の資源尾数である。

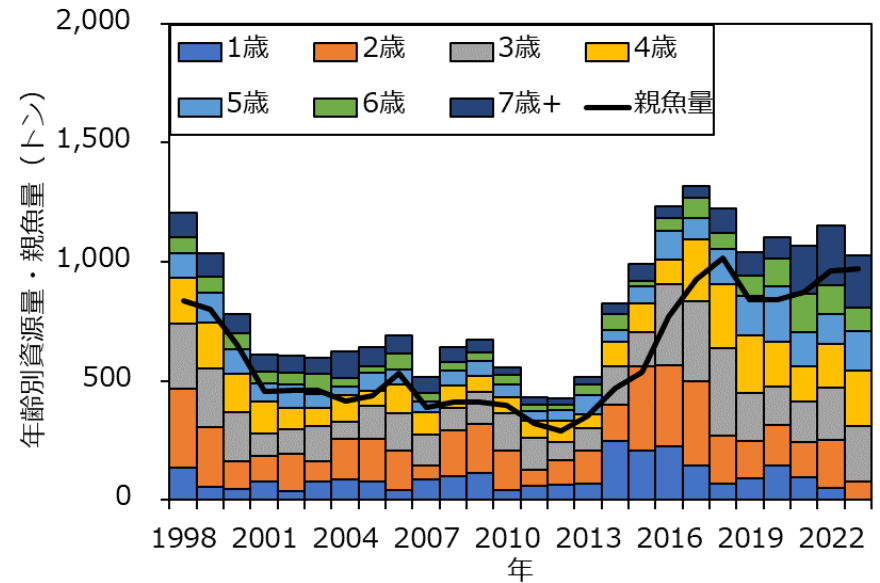


図5 年齢別資源量（棒グラフ）と親魚量（折れ線グラフ）

資源量は2014年以降増加し、2017年には1998年以降で最高の1,319トンとなった。その後は減少し、2023年は1,026トンであった。親魚量も資源量と似た傾向を示したが近年も高い水準を維持しており、2023年は971トンであった。

ヤナギムシガレイ (太平洋北部) ③

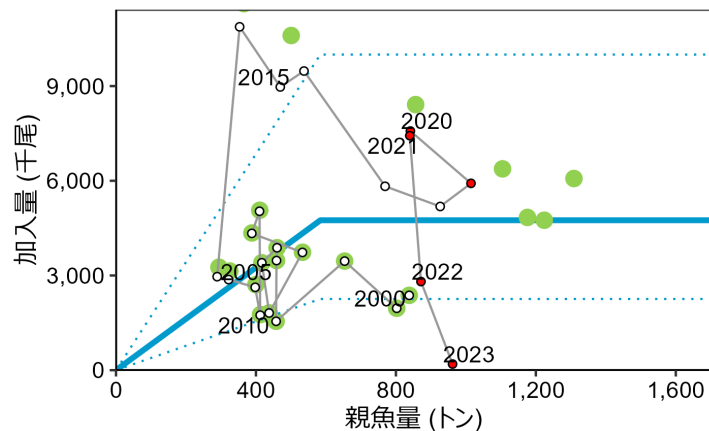


図6 再生産関係

1998～2020年の親魚量と1999～2021年の加入量に対し、加入量の変動傾向（再生産関係から予測されるよりも良いまたは悪い加入が一定期間続く効果）を考慮したホッカー・スティック型再生産関係（青太線）を適用した。図中の青点線は、再生産関係の下で実際の親魚量と加入量の90%が含まれると推定される範囲である。

緑丸は再生産関係式を推定した時の観測値、白丸および赤丸は2024年度資源評価で更新された観測値である。図中の数値は加入年を示す。

目標管理基準値案	限界管理基準値案	禁漁水準案	2023年の親魚量	MSY	2023年の漁獲量
758トン	257トン	23トン	971トン	197トン	186トン

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

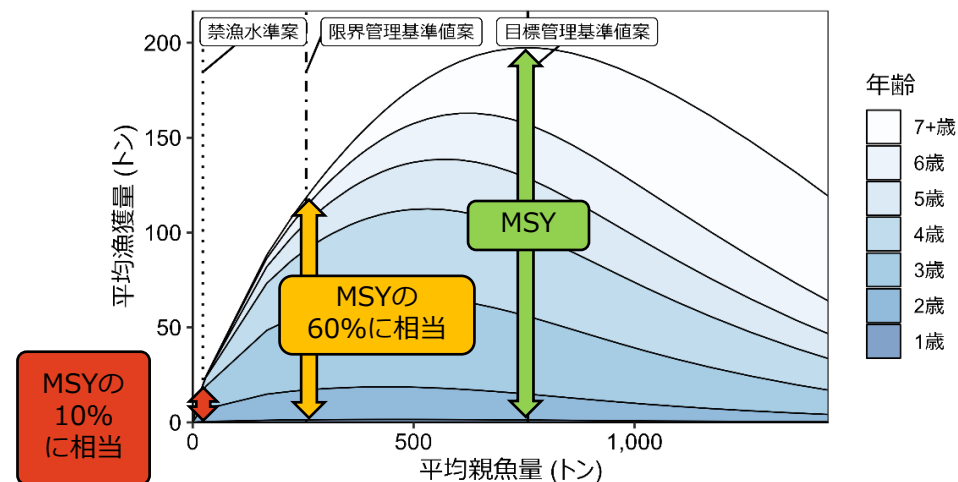


図7 管理基準値案と禁漁水準案

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は758トンと算定される。目標管理基準値としてはSBmsy、限界管理基準値としてはMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準としてはMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量を提案する。

ヤナギムシガレイ (太平洋北部) ④

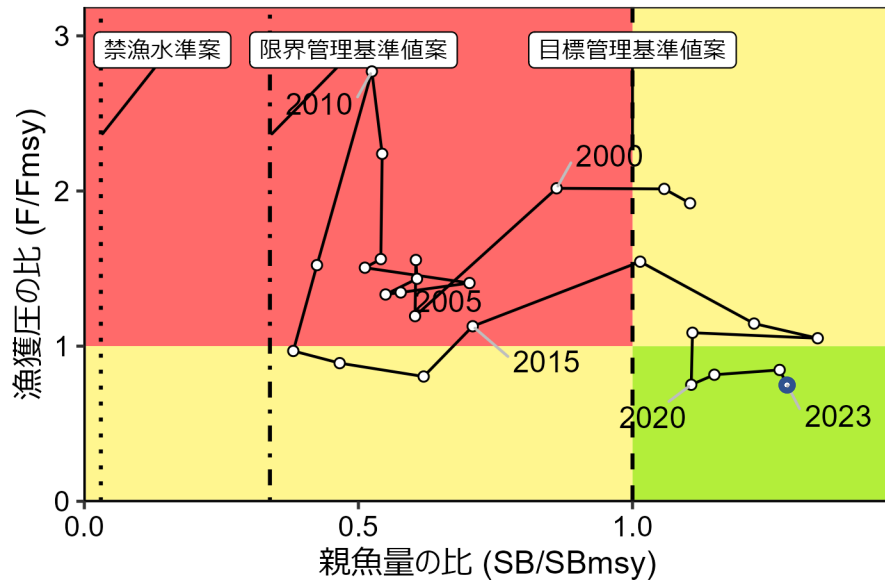


図8 神戸プロット (神戸チャート)

親魚量 (SB) は2000~2015年まで最大持続生産量 (MSY) を実現する親魚量 (SBmsy) を下回っていたが、2016年以降は上回っている。漁獲圧 (F) は1998~2011年はSBmsyを維持する漁獲圧 (Fmsy) を上回っていたが、2012~2014年および2020年以降はFmsyを下回っている。

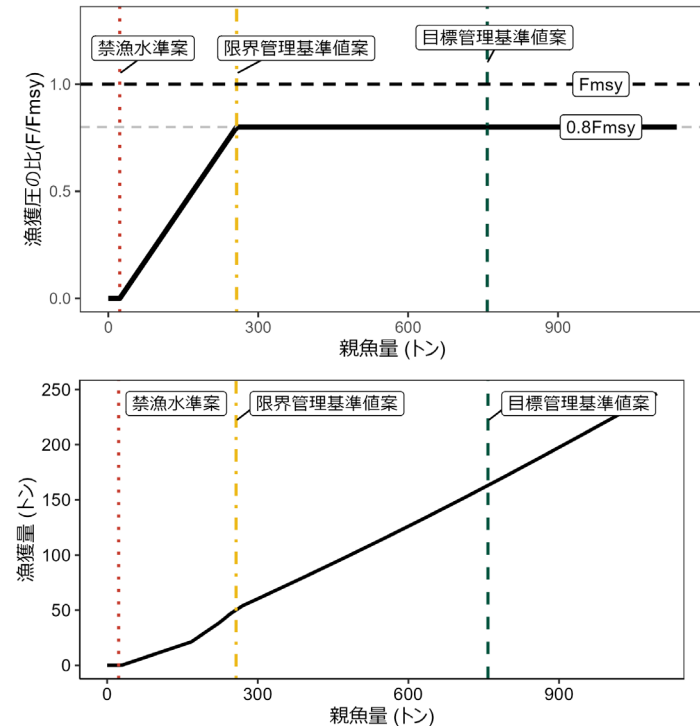


図9 漁獲管理規則案 (上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量)

Fmsyに乗じる調整係数 β を0.8とした場合の漁獲管理規則案を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

ヤナギムシガレイ (太平洋北部) ⑤

将来の親魚量 (トン)

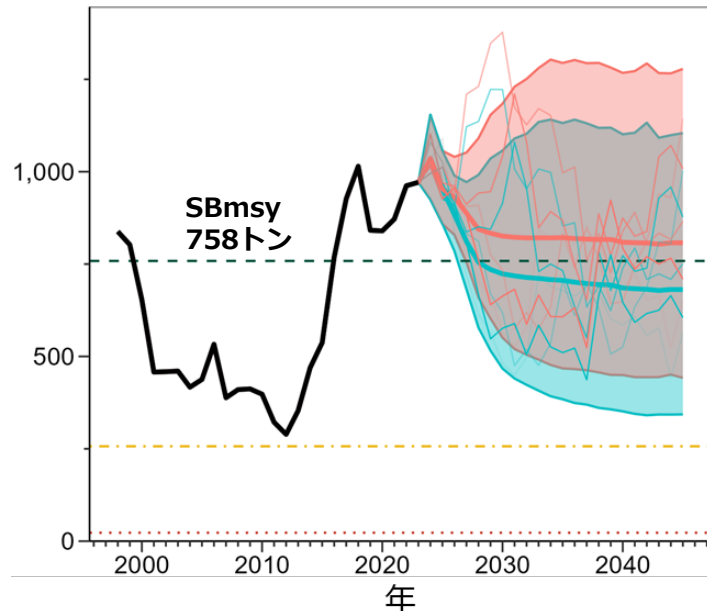
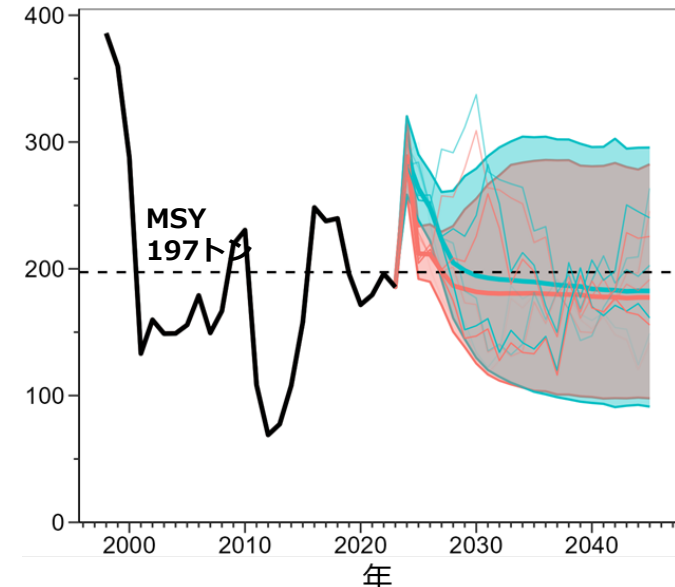


図10 漁獲管理規則案の下での親魚量と漁獲量の将来予測 (現状の漁獲圧は参考)

β を0.8とした場合の漁獲管理規則案に基づく漁獲を継続した場合の将来予測結果を示す。親魚量の平均値は目標管理基準値案よりも高め、漁獲量の平均値はMSY水準よりやや少なく推移する。

将来の漁獲量 (トン)



■ 漁獲管理規則案に基づく将来予測 ($\beta=0.8$ の場合)

■ 現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果 (3千回のシミュレーションを試行) の90%が含まれる範囲を示す。

----- MSY

----- 目標管理基準値案

-.-.-. 限界管理基準値案

..... 禁漁水準案

ヤナギムシガレイ（太平洋北部）⑥

表1. 将来の平均親魚量（トン）

2035年に親魚量が目標管理基準値案（758トン）を上回る確率

β	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035		
1.0	1,036	953	890	822	767	748	737	732	728	726	723	721	38%	
0.9			910	854	804	789	779	774	772	771	769	769	46%	
0.8			931	888	844	834	826	822	821	821	821	821	822	55%
0.7			952	924	888	883	879	877	877	878	878	879	881	64%
現状の漁獲圧			884	811	755	735	723	718	714	711	708	706	706	35%

表2. 将来の平均漁獲量（トン）

β	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035
1.0	288	256	243	220	203	197	193	191	190	190	189	189
0.9		234	228	210	196	191	188	187	186	186	186	186
0.8		212	211	198	187	184	182	181	180	181	181	181
0.7		189	193	184	176	175	174	173	173	174	174	174
現状の漁獲圧		263	248	223	205	199	195	193	192	191	190	190

漁獲管理規則案に基づく将来予測において、 β を0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧（2018～2022年の平均： $\beta=1.0$ 相当）の場合の平均親魚量と平均漁獲量の推移を示す。2024年の漁獲量は予測される資源量と現状の漁獲圧により仮定し、2025年から漁獲管理規則案に基づく漁獲を開始する。

$\beta=0.8$ とした場合、2025年の平均漁獲量は212トン、2035年に親魚量が目標管理基準値案を上回る確率は55%と予測される。

※ 表の値は今後の資源評価により更新される。

本資料では、管理基準値や漁獲管理規則など、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の議論をふまえて最終化される項目については、研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。